

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援事業」

国際芸術教育会議 2015

事業報告書



平成27年3月

東京藝術大学上野キャンパス 美術学部

主催：東京藝術大学

国際芸術教育会議 2015

平成 27 年 3 月

東京藝術大学

学長挨拶

国際芸術教育会議 2015 の開催にあたり、私どもの呼びかけに応じていただき、アジア各地の 10 校に及ぶ芸術大学から多くの先生方やスタッフの方にお集まりいただきました。深く感謝申し上げます。

今日、国際的に活躍できる人材を育成するため、大学のグローバル化が強く求められています。本学も文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」事業に芸術大学として唯一採択され、その支援を受けて、世界をリードする芸術家や研究者を育てるために、芸術大学ならではのグローバル化に関する取り組みを進めております。

振り返ってみますと、本学は創立 120 周年の 2007 年に「藝大アーツ・サミット'07」を、その後 2012 年に「藝大アーツサミット 2012 アジアから世界へ 一連携と共生」を、2014 年には「東アジア文化都市 2014 横浜」の一環として、日中韓の芸術大学の学生による「藝大アーツ学生サミット 2014 ー横浜アート物語ー」を開催し、多くの先生方や学生たちの交流が花開きました。

今回は、主に芸術教育の現場で日々教育活動にあたっておられる先生方をお招きし、本学の同じ分野の先生方や学生たちとの交流を通じて、芸術教育の国際化について事例紹介やディスカッションを行っていただきました。この会議によってお互いの理解が進み、それぞれの国・大学の素晴らしさを連携させることで、アジアから世界に、魅力的な芸術文化を発信していきたいと思っております。

最後になりましたが、この国際芸術教育会議 2015 が歴史に残る契機となることを願い、また、お集まりいただいた皆様のますますのご発展を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。



東京藝術大学長

宍田 亮平

Contents

2	学長挨拶
4	参加機関一覧
6-13	分野別交流
6	ダッカ大学（美術学部）
7	広州美術学院
8	ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン
9	中央大学校
10	シラバコーン大学／ホーチミン市美術大学
11	延世大学校
12	ベトナム国家音楽学院
13	北京電影学院
14	中国音楽学院
16-25	全体会
16-17	基調講演
18-21	登壇者プロフィール
22-25	ディスカッション
26-27	写真アルバム
26	3月17日
27	3月18日
29	総合プロデューサー 挨拶

参加機関一覧

■主催

東京藝術大学

Tokyo University of the Arts

■基調講演

国立台南芸術大学

Tainan National University of the Arts

■参加機関

ダッカ大学（美術学部）

Faculty of Fine Art, University of Dhaka

広州美術学院

Guangzhou Academy of Fine Arts

ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン

National Institute of Design

中央大学校

Chung-Ang University

シラパコーン大学

Silpakorn University

ホーチミン市美術大学

Ho Chi Minh City University of Fine Arts

中国音楽学院

China Conservatory of Music

延世大学校

Yonsei University

ベトナム国家音楽学院

Vietnam National Academy of Music

北京電影学院

Beijing Film Academy

国際芸術教育会議 2015

分野別交流

平成 27 年 3 月 17 日 (火)



ダッカ大学（美術学部）

～共同展示会の開催とディスカッション～



バングラデシュのダッカ大学において油画を専門としている Nisar 学部長および Iqbal 准教授と東京藝術大学油画第6研究室との共同でドローイングの展示会を開催し、それぞれが持ちよった作品についてディスカッションが行われた。

東京藝大油画第6研究室の学生作品では、制作に4年以上かけた、「和紙に墨」という素材を使った表現や、ダーマトグラフの作品、ドライポイントを用いた版表現のドローイングが、ダッカ大学の教員の興味を引いていた。Nisar 学部長からは、東京藝術大学油画第6研究室の学生作品について、作品に対するアプローチの幅広さや、その根幹にある共通性に関して「現代的なアートの中に、例えば屏風・巻物など日本の美術を感じた」との意見が示された。

ダッカ大学の学生作品も展示され、その技法やテーマについて、Nisar 学部長から解説がなされた。洞窟の壁画への強い関心や、人や動物の共存をテーマとしていることなどが説明され、ダッカ大学においては、1、2、3年生の段階では基礎的な制作や物を見て描くということが重視され、4年生になると自身の発想に基づいて展開していくという話がなされた。

ドローイングからタブローに移行する行程についてもポートフォリオの中の油彩作品を介してディスカッションがなされ、全体を通じて、東京藝術大学の OB である Iqbal



准教授からバングラデシュと日本との2つの視点が提供された。

2か国の作品が出会い、意見を交換し合うことを通して、相互の差異をそれぞれが自覚するきっかけになった。東京藝術大学の学生も自身の中にある考えを改めてまとめることができ、国が異なる中で美術への共通性を認識する機会となった。

また、ダッカ大学の歴史・立地・カリキュラムなどについても、実技風景の画像などを交えて紹介がなされ、2国間の相互理解が深まった。両校の今後の交流活動として、ダッカ大学における日本の学生の作品発表・個展の実施について計画が話し合われた。





広州美術学院

～それぞれの取組と、今後の交流計画～



中国の広州美術学院において建築デザイン・視覚デザインを専門にしている趙健副学院長によって特別講義が行われ、同学院の取組と現在直面している課題について以下の話が紹介された。

- 伝統的な教育と新しい教育・国際化時代の教育のあり方については、広州美術学院でも討議されている。
- 長く在籍する教員ばかりが活躍する変化のない大学になってはいけませんが、新しい視点をもった若い教員を登用しつつも、どのように文化的・伝統的な面を継承するかを考えなければならない。
- 国際化時代の教育方法としては、例えば学生を半ば強制的に海外に送り出してしまい、その中で自力によって困難を乗り越える方法を見つけさせるといった形が重要といえる。

また、東京藝術大学の学生からは、美術学部が取り組んでいるプロジェクトについて紹介された。一例として、史跡高松城跡玉藻公園に建つ国重要文化財の披雲閣を会場に用いて行った展覧会が取り上げられ、伝統的な屋敷の内部において現代的な作品を展示したことや、地元の高校生を交えたワークショップを行ったことが説明され、そうした



試みについて、広州美術学院と協力し、各国・各大学の現場において共同プロジェクトを進めていく案が示された。

その後、東京藝術大学美術学部と広州美術学院の教員作品共同展覧会について具体的なスケジュールや計画・概略を打ち合わせ、以下の内容で実施することが検討された。

○東京展：2015年10月29日～11月15日

東京藝科大学美術館陳列館

○広州展：2016年11月3日～11月23日

広州市内

※日程・場所は仮のものです。確定次第、両校のWebサイト等でお知らせいたします。

こうした共同展覧会をそれぞれの国で実施することで、両校教員の交流を通じてそれぞれが直面している現場教育の事情や課題について共有し、また、芸術作品と芸術作品との交流による実験的な取り組みによって多様な角度と観点から活動成果を検証し、国際的な芸術教育の新しいシステムを探っていくことを確認した。



ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン

～特別講義・ポートフォリオレビュー・リサーチワークショップ～



インドの National Institute of Design (NID) において写真デザインを専門にしている Rishi Singal 学部長および鬼頭志帆研究員により特別講義・ポートフォリオレビュー・リサーチワークショップが行われ、東京藝術大学先端芸術表現科の学生 10 名超が参加した。

特別講義では、NID の教育活動においては写真というメディアのもつアートの側面とデザインとしての役割の中道を取りながら、仕事として活かし、世の中に役立てていくことを目指している旨が紹介された。その後、「デザイン」という言葉がもつデザインについての考え方や役割に関して、日本とインドの事情を教員・学生同士で討論した。また、NID 写真デザイン科の学生作品も紹介され、聴講学生からは、インドならではの宗教や政治にかかわる事象を身の回りのレベルで取り上げた作品への質問が目立った。

ポートフォリオレビューでは、東京藝術大学の学生が、一人ずつ自分の作品について英語と日本語を交えて発表を行った。各学生は自分の制作動機等について話を進める過程で、普段は日本語で「言わなくても通じる事柄」を、英語で説明するときには明確に言語化する必要があることにとまどっている様子だった。しかし、学生たちはこの機会を通じて、自分の作品について距離をもって見つめ直し、第三者に見てもらうことへの大切なステップであるという気づきを得たようだった。



ワークショップでは、写真や映像を使った作家たちが、制作の過程で他の作家の作品からインスピレーションや影響を受けそれぞれの文脈で作品をつくっているという状況について、日本の学生たちにも意識的になってもらうことが目的とされた。学生は 2 人組になってインドの現代美術作家について調査し、その作家たちがどういう社会的、政治的、もしくは生活環境の中で制作の種を見つけているのかという背景について議論が交わされた。

NID の教員との交流活動によって、東京藝術大学の学生たちは、日本とインドという離れた土地で、かつ生活様式や文化にも乖離が見られる状況で、遠くにいる他者に思いを馳せながら、その背景についても理解しようとする姿勢を学ぶことができた。



～韓国環境モニュメントにおける探究～



初日は、韓国の中央大学校において彫金・鍛金分野を専門にしている HWANG In Chul 教授によってパブリックアートについての特別講義が行われ、東京藝術大学工芸科の学生 11 名と教員 6 名が参加した。

HWANG 教授からは、以下のテーマについて話が紹介された。

- 都会は一つの大きな空間であり、人間と共に巨大な複合構造として総合環境空間を形成している。
- 環境モニュメントは、都心の中で審美的機能だけではなく、ランドマーク的な役割で人々の関心を引き起こし、とても大事な要素として現れている。
- 韓国では、20 年程前に「建築事業に際して、その美術装飾に事業予算の一定比率を加味すること」を定めた「1% for Art」と呼ばれる芸術文化振興に関する法律が制定され、それ以降今日まで、建築空間におけるモニュメント装飾デザイン等は、首都圏を中心として新たな文化環境として大きな反響を呼んでいる。

2 日目は、染色分野を専門にしている LEE Dongyoul 准教授によって韓国の染色工芸に関する特別講義が行われ、学生 12 名と教員 8 名が参加した。



LEE 准教授からは、以下のテーマについて話が紹介された。

- 韓国の染色工芸は刻々と変化する人々の需要によって、その機能や製作技術において様々な変遷をとげている。
- 染色の視点が美術工芸から機能性が重要視される産業工芸へと移るにつれ、それにあわせて大学教育も方向性を模索している。

これら 2 つの特別講義では、韓国の事例や、テーマに関する両先生の作品も紹介された。どちらにおいても活発な質疑応答が行われ、学生からは「モニュメント設置に関する韓国の条例」や「先生方の制作の動機」などについて特に関心の声があがった。

この他、作品についての意見交換や工房の見学を行い、技法や設備について双方に共通する点と独特の点について共有した。1 日目夜には親睦会も行われ、学生・教員あわせて 20 名以上が参加し、今後も両校の交流を現場主導で進めていくことを確認しあった。





シラパコーン大学



ホーチミン市美術大学

～リトグラフ作品集共同制作ワークショップ～



日本・タイ・ベトナム三か国の芸術大学の友好と、大学間・教員間・学生間の今後のゆたかな交流を祈念して、東京芸術大学・シラパコーン大学・ホーチミン市美術大学の教員7名によるリトグラフ作品集の共同制作ワークショップが行われた。

「具体的に何かモノをつくろう」という考えから始まったこのワークショップでは、各々が自由テーマで制作を行い、その過程においては、決まった手順を踏む流れ作業のような形ではなく、それぞれが技法に富んだ、異なる方法・手法を取り入れていた。

シラパコーン大学において版画を専門としている KUNCHAETHONG Yanawit 准教授はタイから持参した植物を制作に用い、芸術学を専門としている ISAVORAPANT Chaiyos 助教授は、金木犀の香りについて日本語で俳句をつくり、花の絵とあわせて作品を制作した。

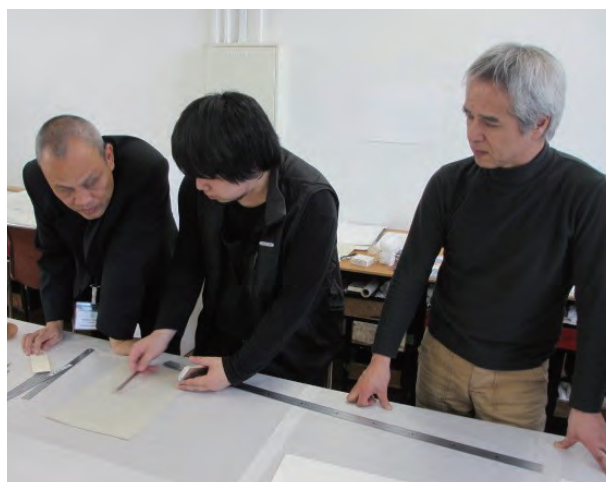
ホーチミン市美術大学においてシルク画を専門としている MAC HOANG THUONG 講師は、日本に来て初めて見た高層住宅を作品で表現し、芸術学を専門としている HUYNH THANH TRANG 助教は、ベトナムの伝統的なリトグラフの手法を織り交ぜて制作を行い、「共同制作を通し



て親睦を深めた日と同じく、次の朝がまた素晴らしいものであるように」という願いを込めた。

また、東京芸術大学の斉藤芽生准教授は、ホーチミン市美術大学から招いた教員2名をモチーフにし、O JUN 教授は、ゴールデンシャワー・蓮・桜というタイ・ベトナム・日本それぞれの国花をひとつのリトグラフにし、国を越えた交流を作品で表した。高倉吉規講師は「いつの間にか我を忘れて制作していた」と笑顔で制作を振り返った。

「芸術家にとって、各々の表現の発生の場として共通していることを」という想いを込めて「目と手の間」(“BETWEEN EYES & HANDS”)とタイトルがつけられたこのワークショップでは、「目と手の間に何かが生まれる、それが作品という一つの出来事としてあるのではないか」という考えのもとで共同制作が行われ、今後の更なる交流を願い、作品集を共通の成果として、交流の証として、それぞれ持ち帰った。





延世大学校

～継続的交流に向けた意見交換と学生アンサンブルの見学～



延世大学校のチェロ演奏家である Yang Sung-Won 教授と、東京藝術大学音楽学部河野教授・玉井准教授・中木准教授との間で対談が行われ、今後の両大学間の交流について意見が交わされた。

Sung-Won 教授からは学生の短期交換留学などを視野に入れた提案がなされた。具体的には、二大学における異なる学事歴（東京藝術大学は4月始業なのに対し延世大学校は3月始業）を活用することで、お互いが授業の履修に差支えない時期に学生の短期派遣・受入を行うことにより、効果的な実習成果を期待できるという話があった。河野教授からは教員の短期派遣についても同様に考え得るのではないかという提案があり、実現に向けた方針について話しあわれた。

また、2015年11月には両大学共同で室内楽の演奏会を開催することが計画されており、同じ音楽空間を共有することで異なる文化や音楽観を互いに感じることが出来るような機会としていくという方向性が共有された。

対談の中で、Sung-Won 教授から“継続的に展開していく交流を”というコンセプトが示され、1回の演奏会やイベントで終わってしまうような形の交流ではなく、互いの文化的な側面に触れることのできるような息の長い芸術文化交流を今後実現していくことが両大学にとって重要であることが確認された。



また、対談の後に Sung-Won 教授は東京藝術大学チェロ専攻学生有志によるアンサンブル“The Cello”のリハーサル現場を訪れ、チェロの技術的な側面とアンサンブルを作り上げていく過程を中木准教授とともに見学した。

Sung-Won 教授からはアンサンブルの音色やリハーサルにおける集中力について賞賛の言葉が述べられた。また、細かい技術的なアドバイスやアンサンブルにおける呼吸と鼓動の大切さについてのコメントが、学生にとって良い刺激となった。

全体を通して両大学間での取組や今後の課題については共有できる部分が多くあり、アジア人として西洋音楽へ取り組む姿勢や、それに基づく教育の方向性について有意義な意見交換が行われた。





ベトナム国家音楽学院

～越中日・アジア音楽の出会い：演奏とシンポジウム～



ベトナム国家音楽学院・中国音楽学院・東京藝術大学の3大学により「越中日・アジア音楽の出会い：演奏とシンポジウム」が開催され、ベトナム国家音楽学院のLe Van Toan 准教授によって「現代生活における音楽遺産」と題する講演が行われた。

講演では、ベトナムが52の民族からなる多民族国家であり、そのことが音楽学院の主要な事業である音楽文化遺産の調査・保存活動にも結び付いていることや、ベトナムの多様な音楽遺産の継承には日本の専門家も協力していることなどが述べられた。

また、ベトナム南部の音楽文化を紹介するDVDがあわせて上映され、参加者の理解を深めた。Toan 准教授はベトナムを代表する音楽学者であると同時に歌手としてのキャリアもあり、講演の最後にはベトナム北部のクアンホーという民謡のひとつを自らの歌声で披露し、ベトナムの民俗音楽がもつデリケートで優しさに満ちたスタイルが参加者に強く印象付けられた。

Toan 准教授は講演に引き続きシンポジウム「伝統音楽の現在と大学教育の役割」にも登壇し、討議に参加するなかで、ベトナム国家音楽学院で行われた民族楽器オーケストラの映像を紹介した。

また、交流活動の今後への展開として、ベトナム国家音楽学院側から東京藝術大学に向けて、以下の要望が挙げられた。



- 学部間あるいは音楽学など特定分野における流協定の締結
 - 交流協定に基づいた教員および学生の相互派遣
 - 東京藝術大学からの派遣教員による日本音楽のレクチャー・ワークショップ・学生向けマスタークラスなどの開催
 - 西洋音楽・伝統音楽のコラボレーションとワークショップの開催
 - 音楽学院が創立60周年を迎える来年（2016年）に開催予定のコンサート・シンポジウムへの東京藝術大学の関係者の招待
- シンポジウムを通して、ベトナムと日本との音楽人の交流は着実に深まっていることが確認され、特に音楽学者間の交流が重要視されていることが注目された。



～特別講義：北京電影大学の歴史と教育～



中国の北京電影大学において映画学を専門にしている WANG Naizhen 教授から、同大学の歴史・教育および学生作品についての特別講義が行われ、東京藝術大学映像研究科の学生および教員が参加した。

WANG 教授からは、以下のテーマについて話が紹介された。

- 歴史——2015 年で創立 65 周年を迎える北京電影大学は、創立 128 周年である東京藝術大学との比較がなされ、約 2 倍の歴史を重ねている東京藝術大学からは学ぶことが数多くあるとの発言があった。
- 教育——北京電影大学において教育が展開されている文学、監督、撮影、録音、美術、映画学、映画技術、演技、アニメ、撮影、視聴覚メディア、デジタルメディアなどについて説明がなされた。
- 学生の作品上映——北京電影大学の学生が制作した映画作品およびアニメーション作品が上映され、鑑賞を通して、中国の学生のレベルについて共有した。

東京藝術大学映像研究科の筒井教授からは、中国電影大学の歴史と中国映画の歴史とは多くの部分が重なっており、中国において有名な映画人のほとんどが同大学の卒業生であるという話があった。

また、特別講義を聴講した学生から「映画学とはどういった分野か？」という本質的な質問がなされ、専門家である



WANG 教授は「美術、音楽、社会、文学、ロジック、符号学などの諸分野を含んだものが映画学である」と答えながらも、「難しい質問だ」と笑みを浮かべる一面もあった。

また、WANG 教授からは、「北京電影大学で行っている授業において、東京藝術大学の先生やその作品についても紹介している」という話もなされ、教育現場において日々行われている国際交流の形が確認された。

今後、北京電影大学と東京藝術大学との間でより活発な交流をしていきたいという共通認識のもと、具体的な計画として、北京電影大学が主催し、WANG 教授も審査員をしている国際学生映画祭に東京藝術大学の学生も出品をする、というアイデアが出された。





中国音楽学院

～合同演奏『春の訪れ～邦楽器と中国楽器のための～』～



中国音楽学院の ZHANG Weiliang 教授と CHEN Leiji 教授は、3 月 18 日のシンポジウムの中で、東京藝術大学邦楽科の教員との合同演奏が披露された。

その演奏にあたり ZHANG 教授は、国際化が進む現代における伝統文化・伝統音楽のあり方について以下のことが語られた。

- 今日、伝統音楽は、これまでにない挑戦を受けている。
- 例えば中国の場合、農村部の都市化が進行し、都市についても現代化が進行している。
- そうした環境の中で、伝統音楽に関する教育は、むしろ教育全体の中では退化しているように感じる。
- しかし伝統文化は、各国にとって根本的なものである。
- 伝統文化・伝統音楽が退化することは、民族の退化を意味しているのではない。
- 国際化の名のもとで進行する欧米化にアジアの国々が影響されている中で、これからどのように自国の文化を見つめなおし、再興していくかが重要になっている。
- また一方で、一步下がった視点では、諸外国の文化についても受け入れていかなければ、自国の文化が退化して



いくことにつながり、民族が廃れていくことになる。

- 合同演奏の準備を通した我々の交流の中で「伝統の継承と発展」という二つの方向性がまったく矛盾していない、という、共通の理解が得られた。
- 伝統の継承は発展の基礎であり、発展は継承の延長である。
- 例えば、日本の作曲家は現代作品の中に伝統要素を取り入れていれることがあり、そのおかげで、日本の伝統文化の新たな一面が世界に発信されている。
- 我々の伝統文化を、いまの時代に相応しい形・新しい形で発展させていきたい。

そして、国際芸術教育会議 2015 のために川崎絵都夫氏が作曲した『春の訪れ～邦楽器と中国楽器のための～』が、未来志向を願って、日本と中国の両国の演奏家によって初演された。この曲を近く中国で再演することも決まり、今後の交流にさらなる広がりがもたらされた。



国際芸術教育会議 2015

全 体 会

平成 27 年 3 月 18 日 (水)

基 調 講 演

～東京藝術大学との交流と、これからの芸術教育について～

東京藝術大学と国立台南芸術大学とは、10 年前に国際交流協定を締結しました。もちろん、それ以前も交流はありましたが、協定の締結後は、より活発で具体的な大学間の連携が行われるようになり、両学は実りのある関係を築いています。その交流の歴史を、これから少しだけご紹介します。

2004 年の 10 月に、本学で金工分野を専攻している大学院生が東京藝術大学を訪れ、先生や学生と交流を行いました。制作現場において技法や道具などについての話を聞くことができ、本学の学生にとって貴重な経験となりました。

2005 年 6 月 16 日には、当時の本学・黄碧端校長が東京藝術大学を訪れ、国際交流協定を締結し、教員や学生の交流に関する覚え書きについても取り交わしました。

2008 年 11 月には、東京藝術大学の宮田亮平学長が本学に来訪され、学生の前で講演をしていただき、本学はオーケストラの演奏で歓迎と感謝の気持ちを表しました。

それ以降も教員や学生の交流を重ね、2012 年 10 月、東京藝術大学が主催した「藝大アーツサミット 2012 アジアから世界へー連携と共生ー」に、アジア全体を繋ぐひとつの輪として本学も参加し、アジアの芸術の発展のために、互いを尊重し、交流を深め、ますます連携を強めていくこと、そして、これまでの様々な交流の上に、新たなテクノロジーをも駆使し、“共生の場”を共同で構築していくことを共に宣言しました。

これらは私たちの交流の一部であり、これまでに数え切れないほどの共同ワークショップやシンポジウムを実施し、また、本学からの留学生を東京藝術大学に継続的に受け入れていただいています。

昨今、私たちは大きな課題に直面しており、これまで以上に「何をすべきか」を問われています。国際化が進むこの世界において、芸術教育の変化やあり方について考え直さなければなりません。

分野を横断した学び、技術と芸術の融合、日常の中の芸術など、取り組まなければならない重要なテーマが数多くあり、以前よりも遙かに急速に動く時代の中で、様々なことに絶え間なく対応し、少し前までは新しかったものを捨て、また新しいものを生み出すことに迫られています。

そうした中で必要なことは、自国・自分自身・自分たちの内側にある歴史や状態を見つめ直すことではないでしょうか。行動や変化の速度、あるいは心拍数までもが増加していく「急ぎの時代」の中で、ゆっくりと己の精神をあたため、考えを深めることが重要なのではないのでしょうか。私たちはもっと伝統を大切に、その上で発展を考えていく必要があります。芸術文化やそれに基づいた関係を一夜で変えることはできません。

こうした局面において、答えはひとつではないかもしれませんが、本学と東京藝術大学との関係、そして重ねてきた交流は、とても重要な意味をもっています。他国・他者・自分たちの外側に触れ、互いに学びあうことは、自分たちを見つめ直すことと同じです。場所も、文化も、精神も異なる相手との対話によって、伝統を確かめ、発展させることができます。

今回、この場に招待していただき、本学の経験について語らせていただいたことを光栄に思います。今後も本学は、東京藝術大学との連携をさらに深め、具体的な取り組みを重ねることによって、想像力に溢れた環境をつくり、学生や教員の可能性を押し広げたいと考えています。

この国際芸術教育会議 2015 が、アジアにおける連携のさらなる広がりにつながることを、そして、本学が東京藝術大学と重ねてきた取り組みがその一助となることを心より願い、結びの言葉に代えさせていただきます。



2008 年、東京藝術大学の宮田学長は国立台南芸術大学を訪問し、講演を行った。



2005 年、国立台南芸術大学の黄碧端前校長と東京藝術大学平山郁夫前学長の署名により、交流協定が締結された。



2004 年、金工を専門とする教職員と大学院生が東京藝大を訪問し、交流事業を行った。

李 肇修(Chao-Hsiu LEE) 国立台南芸術大学



1965 年台湾の台北生まれ。6 才でヴァイオリンを習い始める。11 才の時ブルッフのヴァイオリン協奏曲ト短調を演奏して（日本人の大沢可直指揮）コンサートデビュー。1978 年、最初のヨーロッパコンサートツアーでメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲ニ短調を演奏、オランダ、ケルクラーデの 1978 年国際音楽コンクールで金賞を受賞した華星室内管弦楽団と共演。台北の東呉大学で研鑽を積む傍ら有名な蘇州弦楽四重奏団の第一ヴァイオリニストとなった。同時に台北シンフォニエッタ（現在の台北フィルハーモニー交響楽団）のコンサートマスターとなる（指揮はシカゴ交響楽団の准指揮者ヘンリー・メイザー）。

ニューヨークのマンハッタン音楽大学のラファエル・ブロンスタイン教授に 2 年間師事した後、ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校のラザール・ゴスマン教授に師事、音楽学の博士号を取得。偉大なヴァイオリニストのヴィクトル・ピカイゼンと共に 1996 年より台湾およびトルコのアンカラで活動を開始。ソロヴァイオリニストとしてのリサイタルのレパートリーはバッハからシュニトケ、ダイアモンド、ボルコムなどの現代音楽まで幅広く、台湾の新進気鋭の演奏家と室内音楽にも取り組む。1992 年に米国から台湾へ帰国後は、メンデルスゾーン、モーツァルト、ヴェーバー、ブルッフ、ヴィエニャフスキ、サン＝サーンス、チャイコフスキーの協奏曲などを台湾や欧州のオーケストラと共演。

1997 年、新設された国立台南芸術大学の音楽学部長に任命され、台湾政府を補佐して才能ある若い音楽家を世界の舞台で活躍させることに尽力。2007 年、台湾で史上最年少の大学学長となり、現在、国立台南芸術大学学長。

国立台南芸術大学の紹介

1996 年創立。開校以来、音楽・視覚芸術・映像・文学の 4 学院を有し、特に大学院生を対象に高等教育を提供することを目的としてきた。現代において新たに注目を浴びはじめた専門領域の教育研究を積極的に進め、ドキュメンタリー、映画アーカイブ、アニメーション、芸術品の保存など画期的な専門講座を大学院に設置している。また、台湾の他の音楽教育機関には見られない 7 年間の教育プログラムを音楽・中国音楽学科に導入している。これは細部に注意を払いプロフェッショナルリズムを追求するという建学の精神に基づいたものである。都市部から離れた台南市の官田地区にあるメインキャンパスは、学生達が集中してアートに取り組めるよう計画されている。

優れた教授陣と芸術的雰囲気に恵まれた国立台南芸術大学は、過去 19 年間に目覚ましい成果を上げてきた。芸術の創作と研究に関わる分野におけるプロの揺籃の地として、国立台南芸術大学は台湾の最も特色ある芸術専門の学校の一つと考えられ、世界中の芸術家の注目を集めている。近年は、技術を文化と芸術の中に統合する可能性を模索してきた。台湾のデジタル技術の企業と異業種提携することで、大学はプロフェッショナルで創造性志向の芸術大学としての強みを示すための努力を重ねている。また一方で、伝統や文化の重要性を尊重し、保護するための研究面でも努力を怠らない。様々な国際的活動に教授陣を参加させることで世界中のコミュニティと交流し、地元の優秀なアーティストたちが国際的な場でも存在感を持つように努めている。



登壇者紹介

●モデレーター



三田村 有純(Arisumi Mitamura)

東京藝術大学 学長特命、国際交流室長、美術学部教授

1949 年生まれ。漆芸作家。江戸蒔絵の 10 代目として東京に生まれる。木を彫り、漆を塗り重ね、金を蒔く事で作品を完成させ、日本現代工芸美術展では内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞を受賞。昨年の改組第一回日展では工芸の部で最高賞を受賞。作品は湖北省美術館など内外の公的美術館が所蔵。『漆とジャパン』など工芸文化に関する書籍を 8 冊単著として刊行。「国際漆芸展」など国内外にて多くの交流展覧会、シンポジウム等企画運営する。

●スピーカー



Nisar Hossain ダッカ大学 (美術学部)

1961 年、バングラデシュ、ダッカ生まれ

現職

- ダッカ大学美術学部学部長
- ダッカ大学美術学部素描・絵画学科教授・科長
- ダッカ・デベロップメント・オルタナティブ大学客員教授
- バングラデシュ・ダッカアートセンター・国立美術館理事
- “Depart” 誌編集委員会委員
- 国立美術アカデミー・国立民芸美術館理事

学歴：1981 年ダッカ大学 (美術学士)

1985 年サンティニケタン大学 (インド) (美術修士)

専攻分野：現代絵画、美術材料、およびバングラデシュ民俗絵画

主な展覧会開催地：ジンバブエ、インド、ドイツ、スリランカ、デンマーク、米国、日本、バングラデシュ

その他実績：美術関連の著作記事 15 件、インド、スリランカ、バングラデシュでの 10 回の国際ワークショップ開催



赵 健(Zhao Jian) 広州美術学院

中国全国室内装飾協会副理事長
中国芸術家協会グラフィックデザイン委員会副委員長
広東芸術家協会デザイン委員会委員長
広州プランニング委員会委員
2010 年広州アジア競技大会ビジュアルイメージ・景観システム委員会委員長
2010 年上海万博展示・ディスプレイ委員会委員
専門分野：デザイン、建築・環境デザイン、デザインプランニング



Rishi Singhal ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン

1975 年インド・ニューデリー生まれ。現在はグジャラート州アフマダーバード・ガンディーナガル地区を拠点としている。1993 年～1998 年 CEPT 大学（環境計画・技術センター大学（アフマダーバード））、2002 年～03 年ビジュアルスタディーズ・ワークショップ（ニューヨーク州ロチェスター）、2003～05 年シラキューズ大学美術学部（College of Visual & Performing Arts、ニューヨーク州ロチェスター）で学んだ。幅広い展示・出版活動を行い、いくつかの助成金・表彰を受けた実績を持っている。現在はナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン大学院（ガンディーナガルキャンパス）において、写真デザイン分野のコーディネーターを務めている。



Hwang In Chul 中央大学校

1952 年キョンナム・ハマン生まれ
中央（Chung-Ang）大学校、公益（Hong-ik）大学校大学院、檀国（Dan-kook）大学校大学院に学び、博士号を取得した。
HWANG, IN-CHUL は国内外で 28 回の個展と 4 回の二人展を開催し、さらにシカゴ、パリ MAC2000、MANIF、KIAF アートフェアなど、80 回に上る国際展に出展し、グループ展に 450 回の招待を受けた実績がある。2005 年京畿道（Gyeong gi）芸術祭大賞、中央大科学賞などの受賞歴もある。最高検察庁のシンボル像に選定された作品＜スタンディングアイ - 8 メートル＞を製作した実績もある。
彼は中央大学校芸術大学の学長、及び大学院理事の地位にあり、経営委員会委員、審査員を務めた経歴を持ち、現在は中央大学の教授として勤務している。



Chaiyosh Isavorapant シラパコーン大学

1986 年シラパコーン大学装飾芸術学部応用芸術研究学科卒業後、日本の文部省からの奨学金によって日本で高等教育を続け、2005 年に東京の早稲田大学で建築学博士号（建築史専攻）を取得した。その後様々な大学において芸術・デザイン・建築分野で教鞭を執った後、2011 年にシラパコーン大学絵画・彫刻・版画学部芸術史学科に奉職した。

タイ人学者として日本の芸術・文化を専攻しており、日本の芸術をテーマとした（タイ語の）出版物には葛飾北斎の美術や木版画、安藤忠男の建築に関する著作、ならびに昨年出版された「雪、月、花：日本の庭園」（日本庭園に関するタイ語で書かれた初の本格的な研究書）がある。修士課程の学生を対象として日本の美学に関する講座も主催している。



Huynh Thanh Trang ホーチミン市美術大学

1987 年ソックトラン省生まれ。2010 年ホーチミン市美術大学卒業後、同学教務部および国際事件部門のスタッフとして勤務。2013 年にはベトナム文化・芸術研究所のフェローとなり、同年、さらに文化スポーツ観光省、およびホーチミン市観光局より年間最優秀青年教師賞を受賞した。2014 年に文化スポーツ観光省から「優秀職員」賞を受賞後もトランは美術史研究の情熱と職務励行に向けた意欲をさらに追求して今日に至っている



张 维良 (Zhang Weiliang) 中国音楽学院

中国音楽学院教授、博士課程指導教官、北京音楽家協会副会長、中国竹笛協会会長、中国音楽学院文化部上級審査員兼、中国音楽学院学務委員会副委員長

研究論文は「中国竹笛音楽文化に関する今後の発展見通し」、「Zhang Wei-Liang 中国における音楽の発展について語る」、「竹笛演奏呼吸の理論と実践」、「Feng Zicun（馮子存）の笛芸術とスタイル」、「芸術大学の改革に関する考察」をはじめとして 10 件を超す。

レコードアルバム：「シャオ竹笛の世界」、「Zhang Wei-liang の吹奏アート」、「柳花」、「天逝」、「別れの夢」、「ハッピーミーティング」、「愛を求めて」、「この世ならぬシャオ竹笛の音」、「天と地について」、「竹笛への心酔」、「茶のしたたり」、「紅葉」、「お茶で禅を味わおう」、「茶の詩学」、「遊牧民の新曲」、「蝶の夢」、「鷺の愛」、および数百以上の作品を創作。



Yang Sung won 延世大学校

韓国出身。世界中のコンサートで室内楽奏者・ソリストとして注目を集める。パリ国立高等音楽学校を卒業後、米国インディアナ大学にてヤーノシュ・シュタルケル氏の補佐を務める。カナダのバンフ国際室内楽コンクール、フランスのアンドレ・ナヴァラ国際チェロコンクール、日本のガスパール・カサド国際チェロコンクール、韓国のトンヨン国際コンクールの審査員として招かれる。数多くの受賞歴を持ち、現在は韓国ソウル市の延世大学校音楽大学チェロ部門教授、英国王立音楽アカデミー客員教授、フランスシャトードラブルデジエール、オウオンフェスティバルの音楽・芸術監督を務めている。



Le Van Toan ベトナム国家音楽学院

ベトナム、バク・ニン生まれ。1985年にハノイ国立音楽アカデミー（現在のベトナム国家音楽学院）で音楽学の学士号を取得、その後ウクライナでの奨学金を授与され、2001年に芸術をテーマとして優れた博士論文を作成した。アーティスト、講師、そして音楽学者として活発な実務歴を持っており、国際伝統音楽評議会（ICTM）、ベトナム作曲家・音楽家協会、ベトナム民俗芸術協会、ハノイ作曲家・音楽家協会に所属している。国内外の多数の研究プログラムにおいて、リーダーまたは主導委員会のメンバーを勤めた実績を持っており、ベトナム政府は彼の業績と貢献を認めて、准教授の地位と国家功労教師に指名している。現在ベトナム国家音楽学院院長の地位にある。



王乃真(Wang Naizhen) 北京電影学院

王乃真 (WANG NAIZHEN) 1956年7月20日北京生まれ。北京電影学院映画学教授 / 監督。日本大学芸術学部映画芸術研究所終了、日本戦後映画監督・作品の芸術と思想を研究。主な講義内容は「視聴覚言語」、「日本映画監督研究」、「日本古典アニメーション作品研究」、「ISVF国際大学生映画祭」、「世界大学生短編映画盛典」、「鎮江国際ドキュメンタリー映画祭」などの審査委員を歴任。2009年～CCTV映画チャンネル指定日本映画解説専門家として多数の日本映画を紹介。

個人創作「北京電影学院物語—美少女たちのサバイバル」現地プロデューサー

(日本NHK放送協会最優秀番組賞など3賞) 2001年NHKハイビジョン特別番組

- 著書
- ・「日本映画の大師たち」(1、2、3部 原著 佐藤忠雄；中国映画出版社)
 - ・「愛の足跡——山口百恵映画作品思想と特徴研究」(原著 小笠原隆夫；中国映画出版社)
 - ・「アニメーション事典」専門書(当代中国出版社)
 - ・「日本戦後映画史 上、下」訳著(原著 小笠原隆夫；当代中国出版社)

学術論文

- ・「いつも“無常”に騙される善と悪の人生

—小津安二郎先生誕生110周年没50周年祭」北京電影学院学报

・「日本アニメ産業優勢研究」中国映画出版社

・「怒りの思考者 勇敢な闘士—大島渚の印象と私の追悼」北京電影学院学报

(中国人民大学「映像芸術」第七期全文転載；フランススリー大学大学院博士院中国語期刊誌転載)



国際芸術教育会議 2015 全体会

ディスカッション

芸術教育の 現場にとって、 グローバル化とは どういうことか？

芸術をめぐる環境の変化と各国の状況

2015年3月18日の午後、2日間にわたって行われた「国際芸術教育会議2015」の締めくくりとして、「芸術教育の現場にとって、グローバル化とはどういうことか？」という会議全体の「問い」について、アジアから東京藝術大学に集った6ヵ国10大学によるディスカッションが開催された。

導入として、芸術教育のあり方について、社会環境の動向や変化の視点で議論がなされた。モデレーターの東京藝術大学・三田村有純国際交流室長から「芸術をめぐる環境の変化」というテーマが提示され、各国から、特徴的な状況が説明された。

中央大学校（韓国）のHWANG In Chul 教授より、「韓国には " 1% for Art " と呼ばれる芸術文化振興法があり、建築事業に際してその美術装飾に事業予算の一定比率をあてることが定められており、それが芸術文化環境に大きな影響を与えている」ことが紹介され、そうした社会の動向は芸術家にとって有利に働いているとの話もあり、芸術教育の現場に少なからず影響を与えていることが確認された。同様の話が広州美術学院（中国）の趙健副学院長からも語られ、中国においては法律として形があるわけではないが、北京や上海などで環境デザインに関する似た動きがあり、政府としても今後そうした取り組みを拡大していく機運があるという。

一方で、ダッカ大学（バングラデシュ）のHOSSAIN Nisar 教授とシラパコーン大学（タイ）のISAVORAPANT Chaiyosh 助教授からは、バングラデシュやタイにはそうした法律・条例がないことが説明され、各国において芸術をめぐる社会環境に差異があることが確認された。ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン（インド）のSINGHAL Rishi コーディネーターからは「インドでは、政府は芸術にあまりお金を使っていないが、近年、国の経済状況が好転している影響で、民間資金による芸術活動の支援が活発化している」という状況が説明され、国の経済状況という要因も芸術をめぐる環境にとって大きな影響を持つことが共有された。



日本の教育現場を視察して、何を思ったか？

続くテーマとして、三田村教授は「日本の教育現場を視察して感じたこと」を各大学のスピーカーに尋ね、芸術文化をめぐる環境から芸術教育の現場へと焦点が移された。

延世大学（韓国）の YANG Sung-Won 教授は、初日（3月17日）に視察した東京藝術大学音楽学部器楽科の有志学生によるチェロ・アンサンブルのリハーサルにおいて興味深い体験があったと話した。「20人程の学生が同心円状になって、内側から4年生、3年生、2年生という層を形成していた。リハーサルを4年生が主導し、適宜指示を出しつつも押しつけではなく、下級生の意見も聞きながら民主的なやり方で行われ、非常に知的だった」と YANG 教授は語り、「演奏レベルの高さにも驚いたが、リハーサルのやり方についてもレベルが高く、こうした洗練性された方法は韓国でも今後有効になるかもしれない」として、視察によって得られた知見が共有された。

東京藝術大学映像研究科のスタジオを訪れ、学生が撮影を行っている様子を視察した北京電影大学（中国）の王乃真教授は、「中国とのいちばんの違いは、撮影スタジオを学生が自主的に使える点だと感じた」と述べた。「自分たちで撮影を進行し、機材・場所についても申請すれば借りられ、そこには先生が誰もいない」状況は、中国ではありえないという。王教授は、日本では大学・教員・学生間で信頼関係ができていて成り立つのだろうと感想を述べた。

こうした議論を通じ、教育内容や指導方法だけでなく、学生同士による学び合いの環境や現場の管理方法の観点でも、各国における教育現場の差異が存在していることが分かった。



共同制作や合同演奏を通して、何を感じたか？

ここまでのディスカッションでは、芸術や芸術教育をめぐる各国・各大学の差異について多くの意見が挙げられたが、その一方で、分野別の交流活動として共同制作や合同演奏を行ったスピーカーからは、そうした差異は前提としてありながらも、芸術の共同実践現場には、それを軽々と乗り越える力があることが事例とともに語られた。

東京藝術大学油画専攻の教員とともにリトグラフの制作を行ったホーチミン市美術大学（ベトナム）の HUỖNH THANH TRANG 助教は、「言葉はいろいろな分野において大事だが、ビジュアルアートの分野では言葉無しで意思疎通が図れる。私は美術史を専門としているが、日本語が喋れなくても制作のテクニックやプロセスを教わることができ、作品をつくることができた」と述べた。

また、3月18日のシンポジウムの中で東京藝術大学邦楽科の教員との合同演奏を披露した ZHANG Weiliang 教授は「練習においては何の苦労もなく、楽しく笑いながら、音楽や楽器を通してコミュニケーションをとることができた」と話した。

芸術教育において国際化とはどういうことか？

そして、討論も終盤になり、メインテーマである「芸術教育の国際化」について、各スピーカーから様々な考えが述べられた。

趙健副学院長は、グローバル化時代の芸術教育について、「教育内容」「教育空間」「教師と学生の関係性」という3つの視点で整理し、「芸術の知識や技術だけでなく、それらを時代や社会にどのように適用させていくかを伝える必要がある」「教育空間を教室や大学の中から、社会や現場に広げる必要がある」「教壇に立つ教師のイメージから離れ、学生の横や後ろに立ち、友人や兄弟のような関係性を築く必要がある」と話した。王乃真教授や ZHANG Weiliang 教授もこの考えに同意を示し、教室から現場へと活動を広げ、そこで異なる国や文化の学生同士が共同実践を行うことの重要性を説いた。

YANG Sung-Won 教授も「テクニックは説明可能だが、大学ではそれを超えて、表現をするということそのものを教える必要がある。それは言葉で説明できないが、学生を国際的な交流プログラムに参加させることで、そのインスピレーションを与えることができる。そして、他国とのアンサンブルによって自身のアイデンティティが見極められ、より自分を高めていける」と述べ、学生に国際交流を経験させることが大学に求められる役割であると提起した。また、HOSSAIN Nisar 教授はそうした取り組みの評価に関する視点で「芸術教育の手法を絞ることはできないが、国際交流の中でそれらを定期的に再評価し、両側・複数の側から確かめ合っていくことが大事である」と意見を述べた。



これからの展望と具体的な取組の計画

最後に、各スピーカーから今後の具体的な国際交流計画が紹介された。

ベトナム国家音楽学院のLE VAN TOAN 准教授は「これまで単発的に実施していた他国の大学との合同演奏会やワークショップなどのプログラムを恒例化し、教員や学生の交流を促進させていきたい」として、国際的な教育プログラムの計画を語った。また、ZHANG Weiliang 教授は「連携する大学間で単位の共有を進めていきたい」と述べ、単位互換や単位認定を広げることで、お互いの国・大学でしか学べないことを交換留学などの形で各大学が提供する計画を説明した。三田村教授からも、東京藝術大学の今後の取り組みとして、国費留学生の受け入れを拡大していくことや、「グローバルアートプログラム」として学生の海外活動を促進し、教育の一環として単位化する計画が紹介され、海外交流を恒常的なプログラムとして学生に提供することと、そうしたプログラムをひとつの授業の形として策定・実施することが、各国・各大学が望む方向性として確認された。

そして、東京藝術大学の松下功副学長が、参加国・参加大学同士の交流のさらなる広がりには大きな期待と確信を表し、ディスカッションおよび国際芸術教育会議 2015 を総括した。

「これから連携が始まっていく。この2日間、様々なことを学び、芸術文化の素晴らしさを感じている。国を越え、言葉を越え、芸術文化は共有できる。一緒に何かをやることで、次が生まれる。芸術文化は出会いから始まり、そこから新しい創造が生まれてくる。この出会いを大切に、今後も交流を進め、芸術教育の現場で具体的な取り組みを進めていきたい」



国際芸術教育会議 2015

写真アルバム

平成27年3月17日（火）



キックオフミーティングに集った7カ国11大学の教職員



東京藝術大学の担当教員による挨拶



参加ゲストと分野を同じくする芸大の教員が会議期間中対応した



海外からの参加ゲストによる自己紹介



キックオフミーティングの後には藝大の教育現場を視察した



藝大教職員が参加ゲストを引率し、施設の概要を説明した



他機関の参加ゲスト同士による積極的な交流の様子



言葉の壁を越えた活発なコミュニケーションが至る所で見られた

3月18日（水）



3月18日の全体会は、世界的コンクールで入賞した藝大の学生によるサックスデュオ演奏で幕を開けた



宮田学長は、開会の挨拶で現場交流の重要性を改めて強調した



美術・音楽・映像から分野を超えた多くの参加者が集った



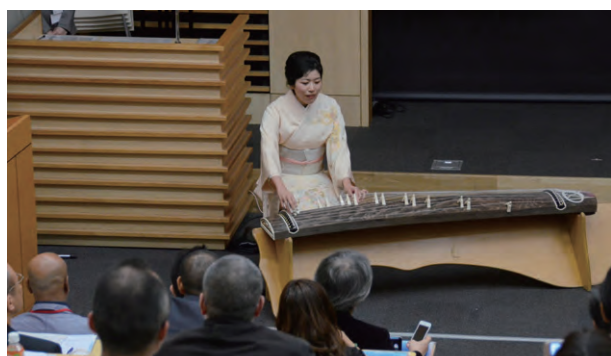
岡本美津子映像研究科長は、藝大の国際化戦略をプレゼンテーションした



藝大における国際的な教育プログラムや、アジアにおける連携について説明された



国際化への取組の事例紹介として、学生による英語でのプレゼンテーションが紹介された



邦楽科の学生達が、実技を交えながら日本文化の魅力を英語でプレゼンテーションした



参加者は、会議を通して構築された連携を生かし、今後更なる交流へ繋げることを約束した

主催

東京藝術大学

東京藝術大学国際交流室

三田村 有純	国際交流室長・学長特命（国際交流及び留学生担当）・美術学部教授・グローバルサポートセンター長
松下 功	国際交流副室長・副学長（研究担当）・教授
田甫 律子	美術学部 教授
三井田 盛一郎	美術学部 准教授
片山 まび	美術学部 准教授
植村 幸生	音楽学部 教授
河野 文昭	音楽学部 教授
迫 昭嘉	音楽学部 教授
岡本 美津子	大学院映像研究科長・教授
山村 浩二	大学院映像研究科 教授

東京藝術大学国際教育芸術会議 2015 担当教員

坂田 哲也	美術学部 教授	（ダッカ大学（美術学部））
杉戸 洋	美術学部 准教授	（ダッカ大学（美術学部））
橋本 和幸	美術学部 副学部長・准教授	（広州美術学院）
鈴木 理策	美術学部 准教授	（ナショナル・インスティテュート・オブ・デザイン）
赤沼 潔	美術学部 副学部長・教授	（中央大学校）
O JUN	美術学部 教授	（シラパコーン大学）
斉藤 芽生	美術学部 准教授	（ホーチミン市美術大学）
澤 和樹	音楽学部長 教授	（延世大学校）
植村 幸生	音楽学部 教授	（ベトナム国家音楽学院）
廬 慶順	音楽学部 准教授	（中国音楽学院）
筒井 武文	大学院映像研究科 教授	（北京電影学院）

東京藝術大学国際芸術教育会議 2015 支援教員

西村 雄輔	美術学部 特任准教授
リンダ・デニス	美術学部 特任准教授
齊藤 佐智江	音楽学部 特任准教授
横田 揺子	音楽学部 特任准教授
イラン・グエン	映像研究科 特任准教授
ショーレ・ゴルバリアン	映像研究科 特任助教
江口 麻子	映像研究科 教育研究助手

皆様との出会いに感謝して 「次世代に送る芸術家の心」

私たちは同じ芸術家として、また芸術を教育する者として共通の興味と問題意識を持っています。今回集まって頂いた皆様が、芸術教育の現場で何が重要で何が真の姿であるかを、わが大学で実践して頂いた事に大きな喜びを感じています。

芸術は瞬時のうちに、享受した者に大きな感動を与える事が出来ます。本物の芸術は時代を超えて、国境を越えて伝わって行きます。一つの表現が何処なる場所でも、いつまでも大きな感動のうねりを作り出すのです。

芸術という表現活動のもとでは言葉も用いずとも、お互いの生き様を理解しあう事が出来るのです。芸術教育の現場でお互いの価値観を出し合い、差違性と同一性について学び合った今回の事業は、その意味で非常に有意義なものとなりました。

美術、音楽、映像と各領域で本学の若手研究者に与えた影響は大きく、それぞれ個人の記憶に残されております。この記憶を引き出すことで、また新たな交流が積み重ねられていくことを信じています。

私達は、若き次世代をどのように教育するかについて論じ合いました。その中で、次世代の表現者が今後どのような交流を模索していけば良いかについても、大きな示唆を受けました。

今回は決して東京藝術大学とそれぞれの大学との個別の交流のみでは無く、来て頂いた全ての大学同士の、良き交流の場であったことをお聞きするにつれ、この事業が未来に向けて一つの礎になったと感じています。

お忙しい中、お出でいただきました各大学の先生方に心よりお礼を申し上げます。それと共に、今後の芸術教育を通した国際交流が益々実の有るものとなり、発展していくことを祈念しています。



三田村 有純

国際芸術教育会議 2015 総合プロデューサー
東京藝術大学学長特命（国際交流及び留学生担当）

発行日 2015 年 3 月 31 日

国際芸術教育会議 2015 事業報告書

編集・製作 東京藝術大学国際企画課

発行 東京藝術大学
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8





国際芸術教育会議 2015
International Arts Education Conference 2015